

《研究ノート》

道標から見た古道『久留里道』と歴史史料

—— 古道復原と地域史料教材化の試み ——

高崎 芳美

1 はじめに

かつて昭和から平成にかけてバブル景気に沸いていた頃、千葉県では国庫補助を受けて、県下で「千葉県歴史の道調査」を実施した。その目的は、様々な開発事業によって急速に変貌・消失しつつあった古街道や水上交通・港湾とそれらに関わる寺社、そして道標等の石造文化財をも含めた歴史的環境について、総合的かつ体系的に記録するというものであった。

当時、高校現場で歴史教育に携わっていた私は、たまたま調査員に委嘱されて、ほぼ二年間にわたり市原市から旧君津郡域にかけて『久留里道』と『房総往還』を実地調査することとなった。私の担当した部分の調査結果については、不十分ながらも千葉県歴史の道調査報告書十五『久留里道』と同十六『房総往還Ⅱ』に記載されている。<sup>(1)</sup> 調査対象は多岐にわたるものであったが、調査委員の先生方からのご助言

もあり、古街道の路傍に佇む石造物を中心として、街道沿いの寺社の境内や古い墓地等を隈なく調べ回った。特に、道標の発見・確認に重点を置いたつもりである。

平成十四年(2002)に高校から千葉県立中央博物館に異動し、歴史学研究科の一員として新たな研究テーマの設定を余儀なくされた私は、学生時代以来自分のフィールドとしてきた西上総地方を中心として、<sup>(2)</sup> 年来のテーマである地域史料の教材化に役立つものとして、再度古道の調査に取り組みることとした。

本稿では、平成十六年(2004)二月の中央博物館歴史講座『古道を求めて——久留里道——』での経験を踏まえて、『久留里道』を取り上げることとしたい。その意図するところは、主として次の三点にある。一つは、報告書の刊行から十余年たった久留里道の現状を把握しながら、不十分で誤植も多かった私の報告文を書き改め、資料的価値を少しでも高めたいということ。二つめは、自分なりに古道調査の方法と古道復原の方法を提示したいという点。そして最後に、古道を歩き調査することによって浮かび上がった地域史料の中から、教材化し得る例を示すということである。

2 久留里道とは

現在、地域で久留里街道と通称されているのは、木更津市長須賀から袖ヶ浦市高谷までは国道409号(房総横断道路)、高谷から君津市久

留里までは国道410号（久留里街道）というように、ほぼJR久留里線と並走し、交通量も多い道路のことである。

私が調査・研究対象としている久留里道は、近世においては今の久留里街道のように一本の特定できる道路ではなく、城下町久留里に通ずる何本もの道を習慣的に総称していたようである。また、久留里道という呼称自体も固定的なものではなく、道標の銘文には様々な表現が見られ、本稿で用いる久留里道という表記はあくまでも便宜的なものであることをご了解頂きたい。道標の銘文は、徒歩の人々のための道案内を意図しているので、例えば、久留里から見て江戸方向を示す場合には、「北は 江戸於か道」のような表記例も見られる。その他の表記例についても、可能な限り忠実に次節で紹介したい。

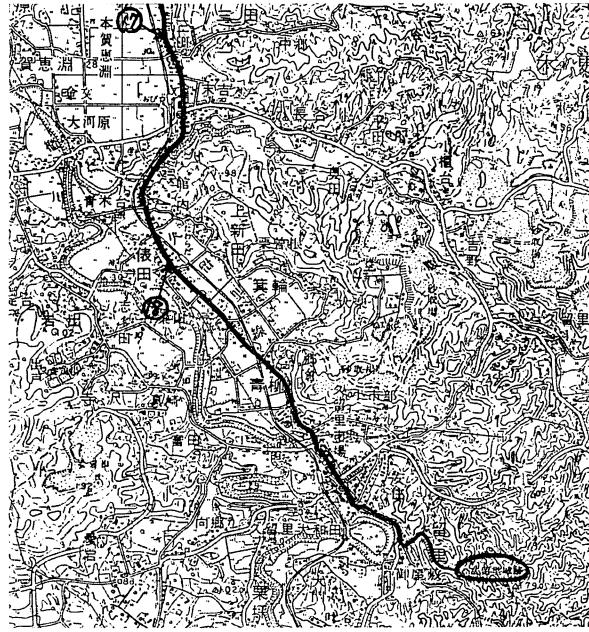
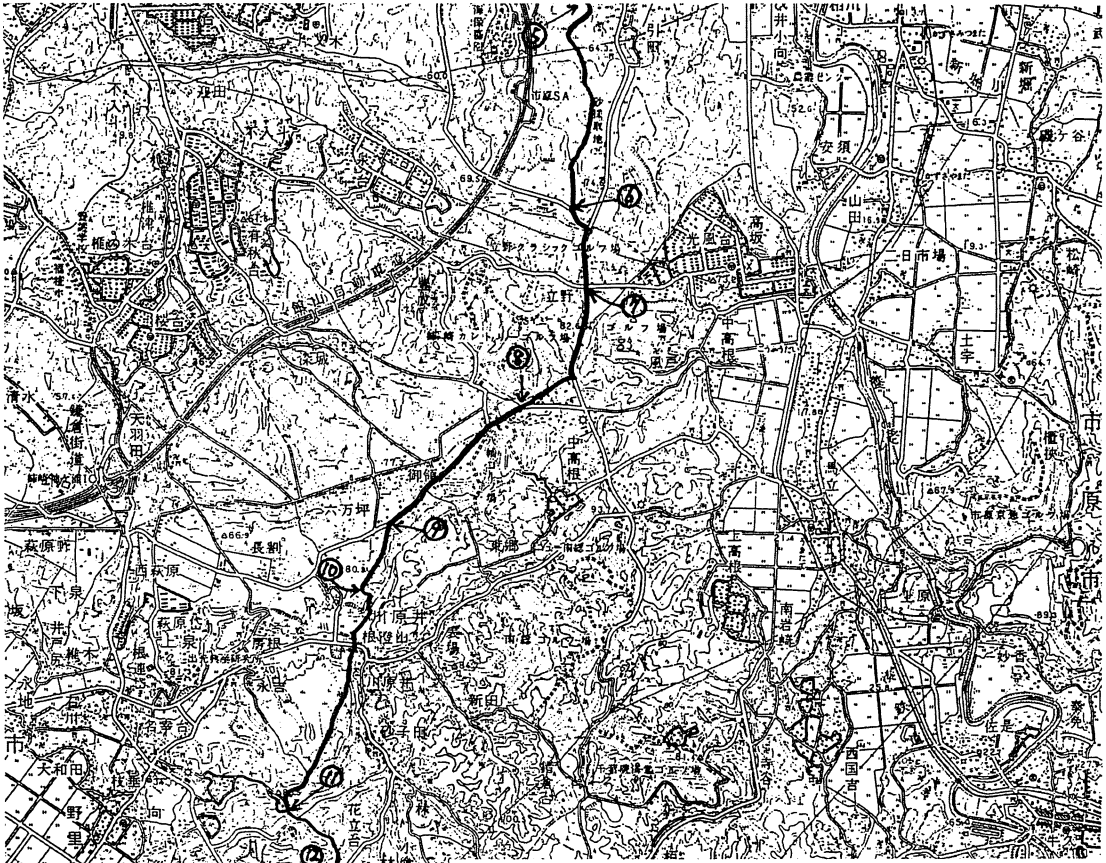
本稿で取り上げる久留里道とは、通称「殿様道」とも呼ばれ、久留里藩黒田氏の参勤交代路としても利用された久留里道中往還のことである。<sup>(3)</sup>このルートは、市原市内から久留里城下に通ずる三ルートのうち、五井から南方約二五kmの久留里までをほぼ直線的につないでいるルートである。中往還の道筋は、一部推定も含めて掲載した地図【図1】中に示したとおりである。また、新たに確認した道標一基と大正期青年団造立道標二基も含めて、中往還には十八地点計二〇基の道標が現存している。ただし、五井の市街から養老川までは道筋の更改が著しく、道標自体が本来の位置から遠くに移築されたものも見られる。耕地整理・宅地造成・新道敷設などの影響も無視し得ないが、広範囲

にわたる山砂採取やゴルフ場造成のために、道そのものが消滅してしまつたところもある。が、総体的には、中往還は現代の交通路から外れた、台地上や丘陵部の山の端を通っている場合が多く、古道の面影を残してくれている。しかし、道としての機能が低下している地域においては、人の目が行き届かないからか、近年とみに産業廃棄物や電化製品など一般家庭ごみの廃棄が目立ち始め、荒廃の度が進み始めている。本稿を草した意図は、前述の三点が主ではあるが、忘れられつつある歴史的遺産としての久留里道の現状を、読者諸賢に少しでも認知して頂きたいとのささやかな願いも込められている。

### 3 久留里道中往還途上の道標

久留里道中往還（以下「殿様道」と略記）の詳細な道筋と、石造物や寺社を中心とした殿様道途上・周辺の文化財の紹介については、千葉県歴史の道調査報告書十五『久留里道』（以下「報告書」と略記）を御覧頂きたい。平成十四～十六年にかけて、五井から久留里までを幾度となく実際に歩き通した限りでは、前述のように景観が変わってしまった所もあつたが、一部推定部分を含めても殿様道の基本的な道筋は報告書で示したとおりである。

この節では、史料紹介的な観点から、殿様道途上の計二〇基の道標と周辺の状況とを、以下に順次取り上げていくこととしたい。



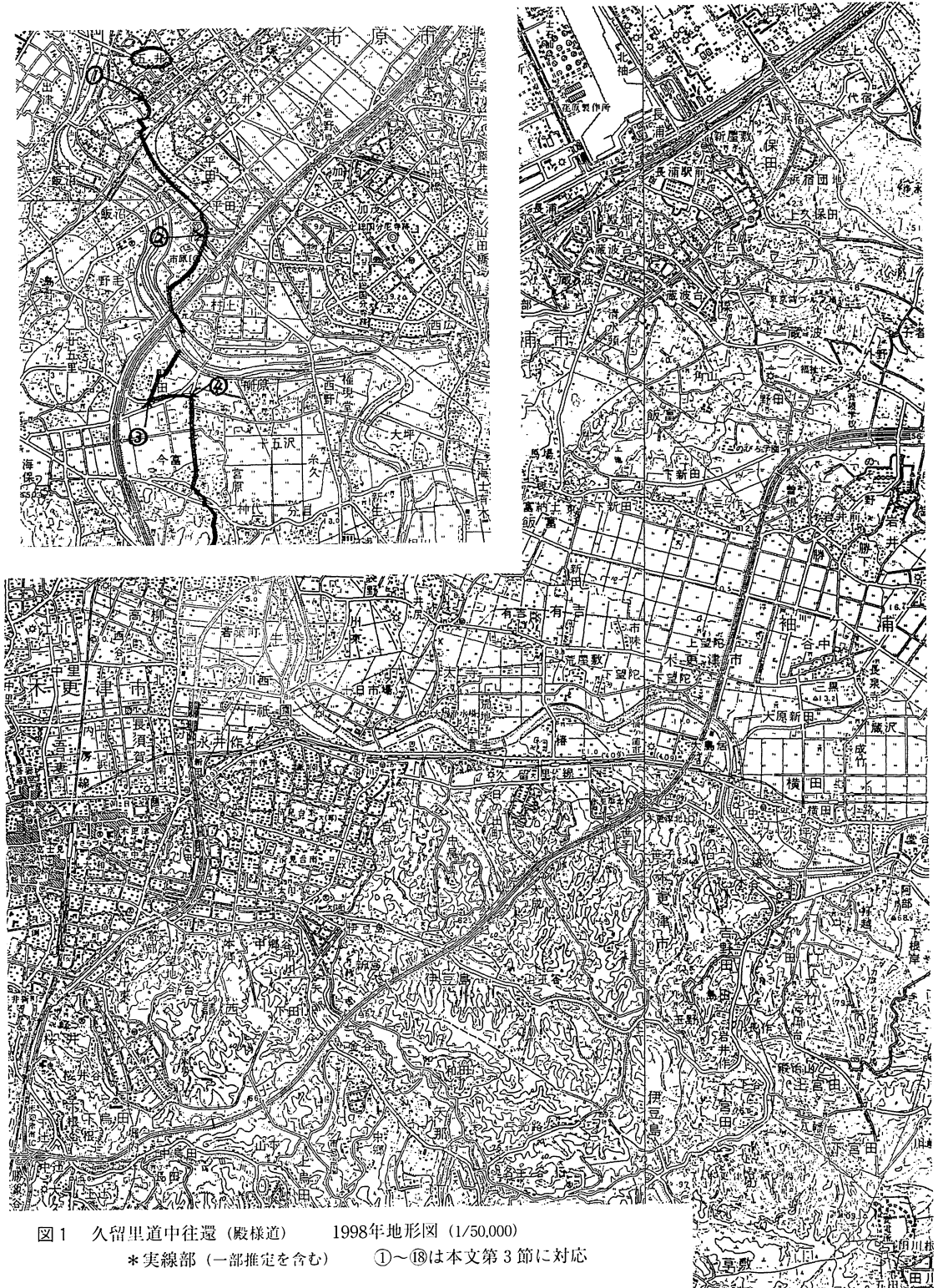


図1 久留里道中往還(殿様道) 1998年地形図(1/50,000)  
 \*実線部(一部推定を含む) ①~⑱は本文第3節に対応

【所在地】

【①】市原市五井字下宿しむじやく

年号 干支(西暦)

文化四年丁卯(1807)

石塔の種類

庚申塔



高 90cm

(正面) 江戸道

(左面) 具流里ミチ<sup>⑤</sup>

(右面) たかくら道

きさら津ミチ

房州道

(台石右面)

(裏面) 文化四年卯八月吉日

下宿

齋賀三次郎

世話人

賀茂五郎右衛門

森安右工門

かつては、五井宿南端で房総往還と別れた殿様道の、起点ともいべき五井字下宿の三叉路に建っていたものである。近くにバス停「保健所入口」があるのはそのままだが、ここから南方のJ・R内房線の踏切辺りまでは、五井駅西口の市街地再開発のために古道の道筋はなくなってしまう。道標そのものは、平成十四年(2002)ここから東へ約4km離れた、市原市能満の市原市埋蔵文化財調査センター敷地内に移築されている。道標は、正面上半分に青面金剛が陽刻された典型的な庚申塔で、下半分に「江戸道」とはつきり読み取ることができ。また、左面の「具流里ミチ」とは、もちろん久留里道のことである。

【②】市原市村上新田

明和三年丙戌(1766)

馬頭観音



高 155cm

(台石正面) 上総国市原郡

村上村

願主

惣若者男

(本体右面) 明和三年丙戌年三月日

(本体左面) 東左国分寺迄半里 う志く迄三里

南 たかくら迄五里 くるり迄六里半

西 右ちばでら迄三里 江戸まで拾三里道法

報告書の時点でも、道標の原位置は不明であったが、その後の館山道市原インターなどの建設で、再度近くに移築されている。位置は、ほぼ市原インターの道路公団施設の北にあたり、国道297号市原バイパスの歩道脇に南面して建っている。写真のように、花が手向けられたりと、地域の人によるものか手入れが行き届いている。銘文の「国分寺迄半里」が示すとおり、東方約2kmに上総国分寺があり、舗装されているのが200mほど古道の面影が残っている。また、「ちばでら」「たかくら」「う志く」は、それぞれ坂東三十三観音霊場札所の第二九番千葉寺、三〇番高倉観音、三一番笠森観音を意図して刻まれたものと思われる。

【③市原市町田】 安永六年丁酉（1777） 馬頭観音



高 120cm

（左面）左 くるり道 上総国市原郡町田村

若者男女中

進藤平蔵

（右面）右 あねさき道 安永六丁酉年

三月吉日

養老川を渡って約六五〇m、梨畑や水田の

間を通り抜けて、県道茂原・五井線とぶつかった所で出会う馬頭観音が、道標となつている。この間の道筋には、小字で「殿様道」という呼称が残つている。なお、道標左脇の小さな石塔には「馬頭観世音」と、右脇の石塔には「名犬奇魂」と刻まれていた。道標は、原位置のままと推測される。

【④市原市今富字高沼】 明和四年丁亥（1767） 石柱地藏坐像



高 125cm

（正面）南 久留里道

（左面）西 江戸道

（右面）東 今富村 若者中

（裏面）北 明和四丁亥年五月建之

過去に車の衝突等で損壊を受けたら

しく、正面上部の地藏坐像の陽刻部位から下に、折損部を補修接着した跡が見られる。現状に当てはめると、左右の銘文の指し示す方向が

道標から見た古道「久留里道」と歴史史料（高崎）

逆になつてしまつたので、本来の位置は道の反対側にあつたと思われる。

道標の左隣には、文政十年（1827）銘で、「神明宮」と刻された石宮を収める祠がある。道標前の舗装路は、「南 久留里道」と示された殿様道であつたことは間違いなく、南方約七百m先の今富坂まで見通すことができる。そこには現在も、近世の今富村名主で本陣でもあつた、根本氏の後裔千葉家の広い邸宅がある。

【⑤市原市宮原浅間山坂】 天明二年壬寅（1782） 馬頭観音



高 113cm

（台石正面）天明二壬寅

十月吉祥日

上総国市原郡

宮原村

願主 惣男女若者

（本体右面）右 くるり道

（本体左面）左り 江戸ミチ

宮原南端の坂道を上つて、今富・引田にまたがる浅間山の山中では、殿様道の面影が比較的良く残つている。坂道の途中、神代かしろに下る三叉路の近くに、写真のように数基の石塔に囲まれて大きな馬頭観音がある。その左右側面が、道案内となつている。道標は、天明二年（1782）以来原位置のままと思われ、次に古い石塔は、右隣の弘化二年（1821）銘のもので、「馬頭観世音」と刻まれている。左隣には前後四基の石

塔があり、銘文が読めるのは三基である。手前右は、「願主川崎啓吉」の築いた「戦馬碑」で、中央に正面を向いた二頭の馬が線刻で描かれ、その右に「日清戦役 明治廿七八年 徴発馬匹」、左に「日露戦役 明治三十七八年」と刻まれている。手前左の石塔も、正面上部に横書きで「戦馬碑」とあり、縦に「馬頭観世音」と刻まれている。後ろ右の石塔には、正面に「明治廿八年十月十日 生馬大神納主石川七三郎」と刻まれている。花などを供え手入れされていることから、現在も供養が続けられているようだ。

【⑥市原市引田大道山十字路口】 明和七年庚寅(1770) 四角柱六地藏



高 136cm

(台石正面) 金百疋 上高根村講中

金百疋 田村講中

金百疋 北青柳村講中

金百疋 上原村山崎氏

金百疋 今津村講中

(台石右面) 明和七年四月吉日

(正面) 地藏立像 幻證童子 くるりみち

南 現心童子

地藏立像 春英童子 たかくらみち

(左面) 地藏立像 かさかみみち

西 願主心春庵勸善法師

地藏立像 あねさ紀みち

(裏面) 地藏立像 江戸みち

北

地藏立像 ちはでらみち

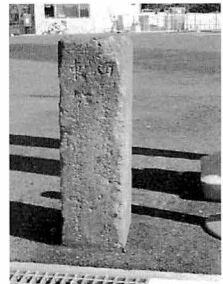
(右面) 弘法大師坐像 かさもりみち

東

大日如来坐像 うしくみち

浅間山坂の道標から約2km南、今富・引田の境をなす殿様道が、立野に入る直前の大道山竹林中に、ごみや雑草に囲まれてこの道標がある。東西南北の道筋を示す銘文どおりに、道標は斜めに変則的に交差するところがあるので、まず原位置のままであると思われる。ただし、東の「かさもりみち」「うしくみち」は約二百m先で、現「立野通り」開削時に切断され、さらに今は私有地の資材置場となって立ち入ることができない。また、北の「江戸みち」「ちはでらみち」の方は、約四百m先の畑地の先で、山砂採取のために完全に消滅し、消滅区間は六百mほどにも及んでいる。なお、西の「かさかみみち」「あねさ紀みち」とあるのは、袖ヶ浦市久保田字笠上にあつた近世の笠上観音と市原市姉崎への道筋を示している。殿様道は、ここから南へ下り坂となって、現「立野通り」に合流し、このあと約七百mばかり直線的な緩い上り坂となって、交通量の多い立野十字路に続いている。

【⑦市原市立野十字路】 大正十四年（1925） 青年団造立道標



高 80cm

（裏面） 大正十四年十一月

姉崎町青年団立野支団設立

（正面）→西 当区ヲ経テ姉崎ニ至ル 約一里三十丁

←東 戸田村中高根ヲ経テ八幡鶴舞間県道ニ通ズ 約三十丁

（右面）→南 君津郡平岡村方面ニ至ル 約一里

←北 海上村今富ニ至ル 約一里

大正から昭和初期にかけて、青年団運動の一環として各所に建てられたものの一つである。古道を調査する際の手掛かりになるので、参考として掲げておきたい。現在の「立野通り」の途上、立野十字路の角に、周囲が舗装される前からあったものなので、先述のごとく殿様道の道筋に、大正期に設置されたものと見てよさそうである。銘文の上には、矢羽根を刻んで東西南北の方向を示しているが、舗装時の建替えの際に正面がずれてしまったらしく、今は正面を西の姉崎の方に向けている。本来は、正面を北の今富の方に向けていたはずである。なお、「南 君津郡平岡村方面」が、現在の袖ヶ浦市にあたり、久留里への道筋を指し示している。

道標から見た古道「久留里道」と歴史史料（高崎）

【⑧市原市不入斗飛地（立野・中高根境）】 紀年不明 供養塔



高 44cm

（正面）地蔵坐像？ 奉唱南無阿（以下欠損）

（左面）大日如来坐像 奉唱光明真（以下欠損）

（裏面）西 あ称（以下欠損）

（右面）北 ち（以下欠損）

立野十字路から南へ約八百m行くと、右折して姉崎ゴルフ場の南端の防球フェンスに沿って、鎌倉街道の道筋が五百mほど続いている。これは殿様道とも重なるのだが、その出口の辺りの草むら中に、下部を欠損した道標の存在を発見した。銘文から、西は姉崎の方、北は千葉（寺）の方を指すものと判断でき、原位置とは言えないまでも、交差点となっているこの付近にあったものと思われる。北への道は鎌倉街道のことで、西姉崎への道も細く続いている。

【⑨ a 袖ヶ浦市川原井字御領】 明和四年丁亥（1767） 供養塔



高 36cm

（右面）左 ひがし

い満とミみち

方

（左面）右 みなミ（正面） 明和四亥天

久留里みち 奉造立地蔵大菩薩

方

十月大吉日



市原市中高根と袖ヶ浦市川原井にまたがる八幡ゴルフ場の西側、ちょうど市境辺りで鎌倉街道と別れた殿様道が、川原井字御領から字六万坪の開墾地に向かって南に方向を転ずるあたりの斜め十字路角に、数基の石塔がかたまっている。そのうち、四角柱の上に丸石を乗せた供養塔が、明和四年(1767)銘の道標となっている。左隣の石塔は、嘉永三年(1850)銘で、正面に地藏立像が陽刻されている。地藏立像の右隣、道標の背後には、二つに折損した青年団造立道標が、別々に並んで建っている。参考までに、次に掲げておく。

【9b 袖ヶ浦市川原井字御領】 大正十年(1921) 青年団造立道標



二つ合わせて 高77cm

\*電柱の脇は下半分、上半分はその左隣

(右面) 大正十年十二月川原井青年支団

(正面) → 姉ヶ崎町深城二至ル

← 当区枢要里道二接ス

(左面) → 市原郡戸田海上東海方面二至ル

← 約五丁ニシテ当区姉崎里道二接ス

明和四年(1767)の道標、大正十年(1921)の道標と、ともに本来の位置は不明だが、銘文からわかる道筋からして、この斜め十字路のどこかに設置されたのは間違いない。ちなみに、「市原郡戸田海上東海方面二至ル」は「ひがし い満とミみち」にあたり、「当区枢要里道二接ス」が「みなミ 久留里みち」の方向のようである。

【10 袖ヶ浦市川原井字六万坪馬之坂】 文政十三年庚寅(1830) 四角柱専用道標



高68cm

(右面) 文政十三年寅

(正面) 右 いまどみ

左 あねさき

(左面) 願主 石工大嶋久兵衛

迅速図上に、「馬之坂」と表記され

たところがある。六万坪の開墾地を過ぎて、川原井の中央部にある水田地帯に下りていく、二五〇mほどの切通しの坂道のことである。簡易舗装されてはいるが、左右を木々で覆われて薄暗く、古道の面影を残している。その坂道を下り始めた右側の斜面に、いずれも文政十三年(1830)銘で、正面を坂下の方に向けた石塔が、相前後して二基建っている。上が駒形の「三夜塔」、下が写真で示したような四角柱の専用道標である。坂を上りきった所が三叉路になっているので、南の久留里方面から北上してくる人々のための道標と思われる。

【11 袖ヶ浦市川原井(林・野里境)】 天明八年戊申(1788) 念仏供養塔



高71cm

(右面) 川原井村願主

右くるり道 清右衛門

東 茂八

左うしく道 長八

市之丞

(正面) 天明八申年

地藏坐像 南無阿弥陀佛

十一月吉日

(左面) 右江戸道 根澄山砂田谷

西 念佛講中

左木更津道

馬之坂を下りた殿様道は、左手に根澄山を見ながら、川原井中央部の水田地帯を東西に走る県道南総・昭和線を横切り、川原井台地へと上って行く。袖ヶ浦市永吉と川原井の境界となっている道筋は、右手に現代の「東京ドイツ村」を見るも、左手には畑が続き古道の雰囲気が残っている。県道から約2kmで、県知事が認定した「教育の森」に入り、道もほぼ往時のままで木々や雑草におおわれている。この道標は、かつて川原井・林・野里の境界接点辺り、道脇草むらの中に転げ落ちていたものを、地元の人が現在地に建て直したものとこのことである。左右両面の銘文から、西の「右江戸道」・東の「右くるり道」が殿様道を示していることがわかる。西の「左木更津道」も舗装道ではあるが確認でき、また東の「左うしく道」は「右くるり道」とともに、ほぼ古道の雰囲気を残して続いていた。ただ残念なのは、所々に粗大ごみを主とした一般家庭ごみらしきものが、捨ておかれていたことである。

道標から見た古道『久留里道』と歴史史料(高崎)



高 94cm

【12 a 袖ヶ浦市高谷延命寺門前】宝暦四年甲戌(1754) 角柱地藏坐像

(正面)

宝暦四甲戌天 願主高谷郷

再建地藏大士者為自他同利益

二月吉辰旦老若系敬白

(右面) 北 いまとみ道 三り

(左面) 南 久るり 二り十四丁

延命寺は、殿様道の通る袖ヶ浦市林の丘陵南方、高谷の集落に面した山の端にある真言宗の古寺である。その門前左右に、数基の石造物がある。宝暦四年銘で、正面上部に地藏坐像が陽刻された舟形四角柱の石塔が、道標となっている。左右の銘文と現在の地形図や迅速図とを照らし合わせると、原位置は寺の背後の丘陵部のいずこかであったものと推測される。殿様道と思われる古道と通称大正坂と呼ばれる道の交差点が、寺の北東約四百mのところにある。



高 82cm

【12 b 袖ヶ浦市高谷延命寺門前】寛政二年庚戌(1790) 供養塔

(正面)

願主

寛政二戌年五月吉日桐谷市兵衛

東 奉供養諸国霊場

う志く かさもり道

(右面) 北 あ称さき ちはてら道

(左面) 南 くる里 たかくら道

前掲の宝暦四年(1754) 銘の道標と同じく、延命寺の門前左手前に前者と並んで建っている。正面の銘文から、寛政二年(1790) 銘で回国供養塔の類と思われる。また、東・北・南を示す銘文から原位置を推定すると、寺の南方約四百mにある、現在も交通量の多い高谷交差点あたりが、有力な候補地の一つである。

【13】木更津市真里谷字山王宿

享保四年己亥(1799) 地藏立像



高 140cm

\*蓮華台座の下の台石が道標

ただし、蓮華台座の正面銘文「奉造立」に接続すべき銘文の面が、現在では補修時に間違つて右面となっている。

(右面) 本来は正面

享保四己亥天 山王宿

十月十五日 大久保

地藏尊為二世安楽

是より南久留里へ稲荷塚

二里拾町 男女念佛講

(左面) 本来は裏面

(正面) 本来は左面

従是北江戸道今富三里

町

従是東牛久迄式里

袖ヶ浦市高谷の南端から木更津市に入り、現在の久留里街道は国道410号となつて、ほぼ南北に走っている。バス停大稲のすぐ東側が、木更津市大稲と真里谷の境界となつており、殿様道は境界線の東にある真里谷の日枝神社下を、国道と平行して走っている。この道標は、T字路に造られた覆い屋内の三基の地藏立像のうち、左端の台石部に認められる。地元の方の話によると、本来は覆い屋もなく、背を東の牛久方向に向けて、反対側の道角に建っていたとのことである。そのことは、銘文からも首肯できよう。なお、「北江戸道」を示す部分には、今富までの距離が「三里拾町」と刻まれている。また、現在の大稲の前身が、近世には「大久保」村と「稲荷塚」村であつたことが読み取れる。

【14】木更津市真里旧東善寺境内】正徳五年乙未(1715) 六角六地藏



高 118cm

\*六角柱の下半分の四角柱が道標

(左面) 木更津迄三里半

是より西

真里谷川通り

(右面) 東牛久へ二里川道

是より

北八江戸於かみち今富

まで三り八丁山道

(正面)

願主

正徳五乙未十月廿四日 真至

男女三十六人

奉造立六地藏尊講中

為二世安樂

是より南 久留里道二里八丁

高藏へ二里川有

山王宿の道標から南へ七百m弱、武田川に面して真里の日枝神社がある。殿様道の正確な道筋は定かではないが、かつて神社の裏手の道角にあったらしい、東西南北の道筋を細かに示した道標が、神社と地続きの旧東善寺境内の一隅に移築されている。銘文からは、「川通り」「川道」とあるように、通行者に対して、この近くを流れている小櫃川や武田川（小櫃川の支流）を目印にするようにとの意図が感じられる。また、「江戸於かみち」の用法は、後述する君津市俵田たわらだの道標とともに特徴的である。

【15】木更津市下内橋諏訪神社境内】享保三年戊戌（1768）台石のみ



高 32cm

(正面)

右ハ久留里

(右面)

奉造立念佛同行

赤坂

左ハ笠森

すわ原

(左面)

享保三戊戌天

十月十三日

真里の日枝神社から南へ約一・五km、木更津市茅野かやのと下郡境しもごけあたりまでは殿様道の道筋は判然としなない。が、JR久留里線の馬来田駅以南、ほぼ線路と南北に並走している現久留里街道と殿様道とは、それほど離れることはなく真里谷から茅野の集落や田畑をぬって、君津市の山本の集落に続いていたものと思われる。それを裏付けるものとして、古い寺社の境内に、旧道の道角から移築されたといわれている道標が二基現存している。その一つが、馬来田駅北東約二五〇m、現久留里街道に面した下内橋字諏訪原すわはらの諏訪神社境内にある。今は台石の上部に、本来別の庚申塔が載せられているが、報告書執筆當時には、台石部のみが他の石造物と並んで置かれており、本体は見当たらなかった。多分、「奉造立念佛同行」という銘文からして、念仏塔・地藏像の類かと思われる。また、神社の近くには、「右ハ久留里」「左ハ笠森」の指示に見合うような道筋が確認できる。現在利用されている笠森方面への道としては、馬来田駅前から東へ向かう県道鶴舞・馬来田停車場

馬線があり、その道筋は迅速図にも認められる古くからのものである。なお、右面の銘文はいずれも神社近くの字名で、「赤坂」は真里谷字赤坂、「すわ原」は下内橋字諏訪原のことである。諏訪原という字名は、小林一茶の『七番日記』中、文化十二年(1815)十一月二十日の記事にも見出すことができる。<sup>(8)</sup>



高 96cm

【16木更津市茅野善雄寺境内】元禄十五年壬午(1702) 六角六地藏

(正面)

元禄十五年壬午十一月吉日本願十三人

奉造立地藏尊像為二世安逸

助成旦越八十人

殿様道の道筋から移築されたと思われる道標が、六角柱の六地藏となつて茅野の善雄寺門前にある。現在の久留里街道(国道410号)からは、東に四百m弱離れたところだが、東西南北の道筋を示した銘文からして、善雄寺近くを通っていたであろう殿様道にあつたものとみて、まず間違いなからう。次に、正面以外の各面の銘文を時計回りに記しておく。

(左前) これより

南 くるり道

二里

(左後) これより

西 たかくら

かの乃道

内十八丁川道

一里十八丁

(裏面)

西上総國望陀郡

畦蒜莊

萱野村

(右後) これより

きた ゑど道

十七里 (右前) これより

ひがし かさもり

三里半

旧東善寺境内の道標と、似通つた表示の仕方が見て取れよう。

此内二里行川

【17君津市三田】

文化二年乙丑(1805)

四角柱六地藏

(台石右面)

世話人

村中 願主

惣左エ門

横田村

石工

大野寅四郎



高 143cm

(正面)

地藏立像

あゆみさき四里

(裏面)

地藏立像

たかくら一り半

北 ちとみち

西

地藏立像

かさもり四里

(左面)

地藏立像

きさら須三り半

地藏立像

南 くるり一り

JR小櫃駅から北に約五百m、久留里線と国道410号にはさまれた三田の集落内に、わずかではあるが古道が残っている。その三叉路に簡

易なトタン屋根で覆われて、手入れの行き届いた地蔵立像と台石を含め総高約一八〇cmの笠付四角柱六地藏がある。二体の地蔵立像が陽刻された三面の下半分に、北・西・南三方への道筋が記されている。周囲の状況や銘文の示す方向からして、道標は原位置のままであると思われる。なお、そばには丁寧な解説板が君津市によって設置されており、「遺産名 久留里道（三田道標）」として、「二十一世紀への継承遺産」に指定されている。「北多どみち」と国道の交点にも案内板があり、わかりやすい。

【18】君津市俵田たわだ

元禄二年1689

六角六地藏



高 108cm

(正面) 元禄二年巳 是より北は江戸於か道なり

地蔵立像

十月吉日 是より西ハ江戸ふなみちなり

(裏面)

俵田村願敷

地蔵立像

當村念佛講施主為現當安樂造立

廿九人敬白

木更津石や

三田の道標から南へ二km余、J R俵田駅前十字路、現久留里街道(国道410号)と木更津方面に通ずる県道(小櫃・佐貫停車場線)の交差点角に、久留里に向かう殿様道最後の道標がある。過去に何度となく車の接触などを受けたため、現状では台石下部をコンクリートで頑丈に補修し、三田と同様に「遺産名 久留里道(俵田の道標)」として、君津市により「二十一世紀への継承遺産」に指定され保護されている。「江戸於か道」「江戸ふなみち」の表記法は希少で、特に「ふなみち」は、西へ約七百米の小櫃川岸から川船で下っていき、木更津船に乗り換えて江戸へ向かうルートを示すものである。

以上が、殿様道途上で実地に確認した道標二〇基と、それらの周辺状況である。また、実地調査時に常に携帯して利用した迅速図と現代の地形図上に、殿様道の道筋を推定部分も含めて示しておいたのご覧頂きたい。先述したとおり、五井から南の久留里へと、ほぼ直線的に走っているのが見て取れよう。この中で、袖ヶ浦市高谷の延命寺周辺から木更津市真里谷にかけての道筋は、小字や伝承などの詳細な分析やさらなる現地調査で、精度を高めていけるかと思われる。今後の課題である。

なお、二〇基の道標のうち、紀年不明一基と大正期青年団造立道標二基を除くと、最も古いのは君津市俵田の元禄二年(1689)のもので

ある。そして、ほぼ半数の九基の道標が、寛延三年(1750)から寛政十二年(1800)の間に造られている。このことは、寛保二年(1742)に黒田氏が上野沼田より久留里に転封となり、土屋氏改易以来廢城となっていた久留里城が再建され、延享二年(1785)に完成を見たことが背景として考えられる。参勤交代路としてはもちろん、交通需要の増大が道標の造立につながったものといえよう。

道標となっている石塔の種類には様々なものがあるが、県下で最も多い庚申塔<sup>(9)</sup>は殿様道では一基のみで、地藏塔が約半数の九基を占め、中でも一石六地藏の多さが印象に残る。市原市域に、馬頭観音塔が三基ある点にも注意しておきたい。

いずれにしても、道標の造立は何らかの命令で受動的に行われたものではなくろう。銘文に「若者中」「村中」「講中」などとあるように、殿様道の通る地域住民有志の手で、いわば自発的に行われたものと考えられる。地藏信仰・念仏講などの日常的な素朴な信仰を背景としながら、久留里城再建や「千葉寺」「高倉」「笠森」などの観音霊場巡りによる通行者の増大をふまえて、殿様道途上の分岐点や村境など、簡潔な道案内を兼ねた多様な石造道標が築かれ続けたのであろう。中には戒名が刻まれて供養を主としたものもあるが、大半は道案内を意識し通行者の利便を図りながら、石造道標を造立すること自体に、皆で功德を施すという意味を込めていたのではなかろうか。<sup>(10)</sup>

#### 4 古道の復原と調査のねらい

久留里道のような古道の調査は、迅速図や地形図を利用しながら、今に残る道標を確認していくことが、最も取り組みやすい方法である。それに加えて、現地調査による道祖神等の石造物の分布や古寺社の把握が、道筋の確認の助けとなり得る。さらに、地元の方々からの小字や古くからの伝承等の聞き取り調査や、道中日記などの古文書類の利用もあげられる。いずれにしても、長期にわたつての地道で辛抱強い、基本的には徒歩を主とした現地調査が必要である。

管見の限りでは、古道や道標調査に関わつてきた先学のほぼ共通の調査のねらいは、古道の復原にあるといえよう。<sup>(11)</sup> もちろん、土器等の復原と違つて、古道そのものを復原するのはまず不可能である。したがつて、ここでいう古道の復原とは、現状において道筋がどこにどのように通つているか、明らかにすることである。

私の場合は、明治十年代に作られた迅速図上の道路網が、江戸時代(特に後半)のそれとほぼ一致するといふ見解<sup>(12)</sup>に立つて、まず初めに、迅速図中に殿様道を捜し求めてみた。それを示したのが【図2】である。次に、現状の道筋を一部推定を含めて、地形図上に示したものが【図1】である。前節で紹介した道標①～⑯のおおよその所在地も、図中に明示しておいたのでご覧頂きたい。五井・久留里間の殿様道自体は、直線距離にして二五kmくらいのものだが、道標の分布密度はか

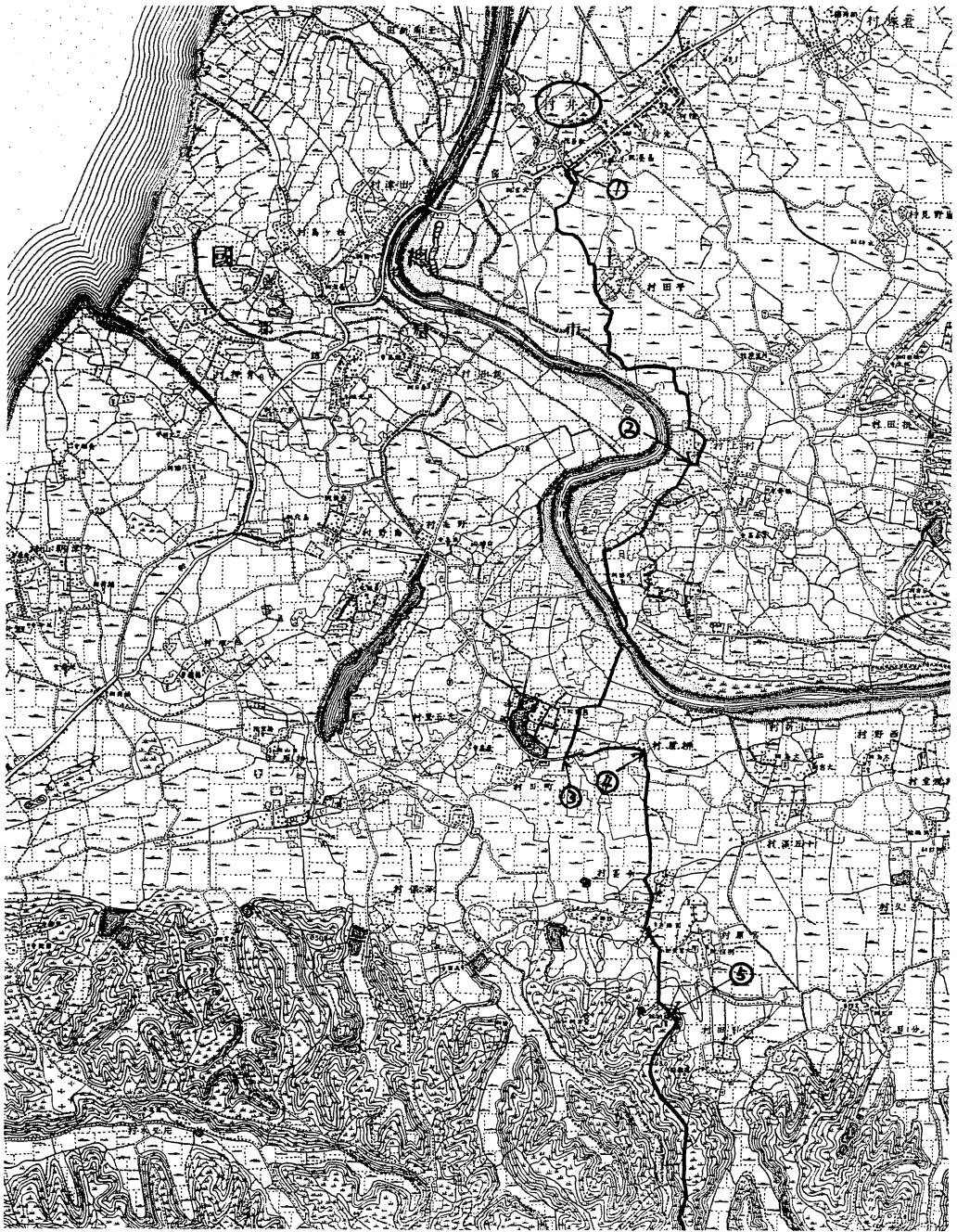


図 2 - 1 五井～引田 (明治15年測量迅速図)



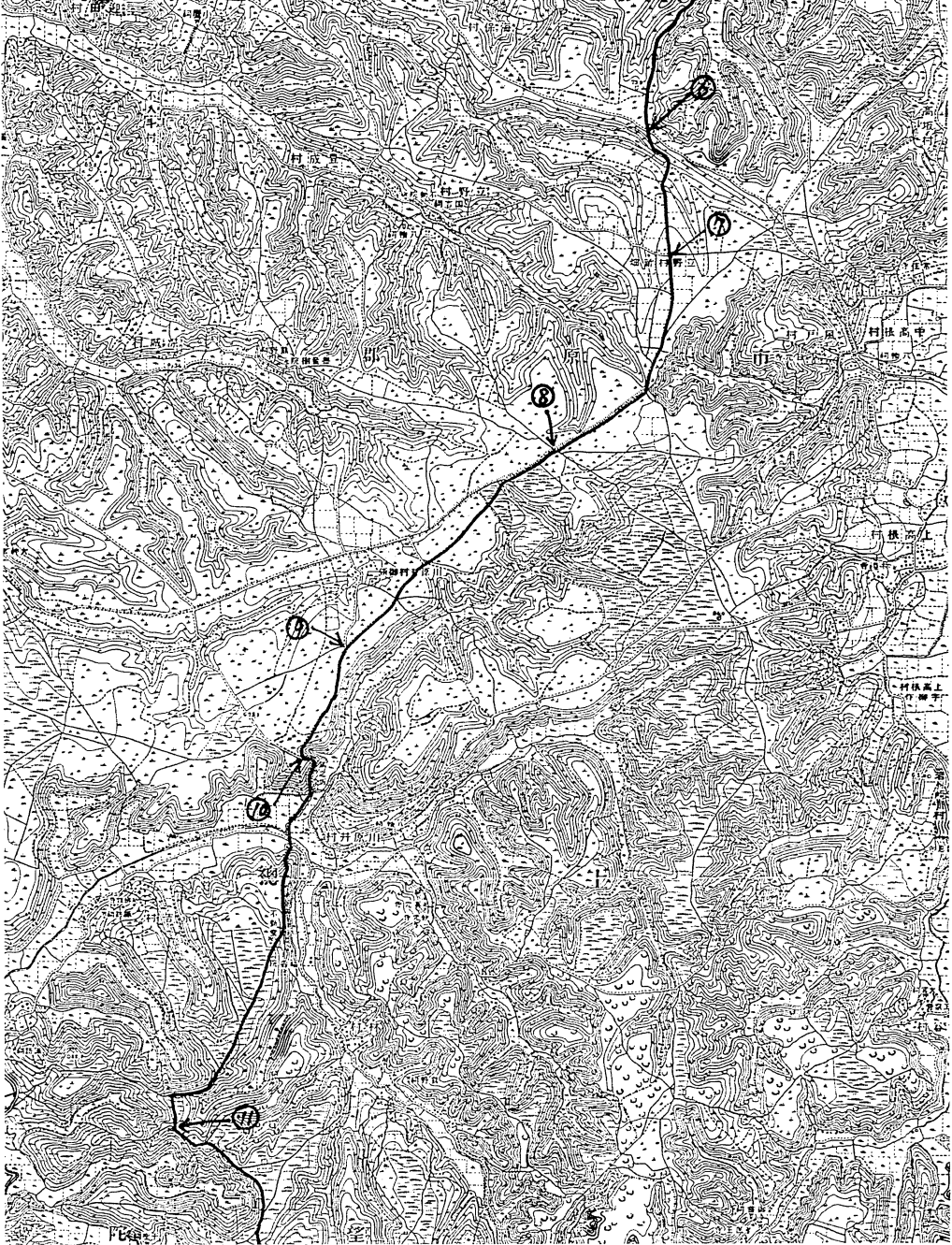


図2-2 引田～高谷

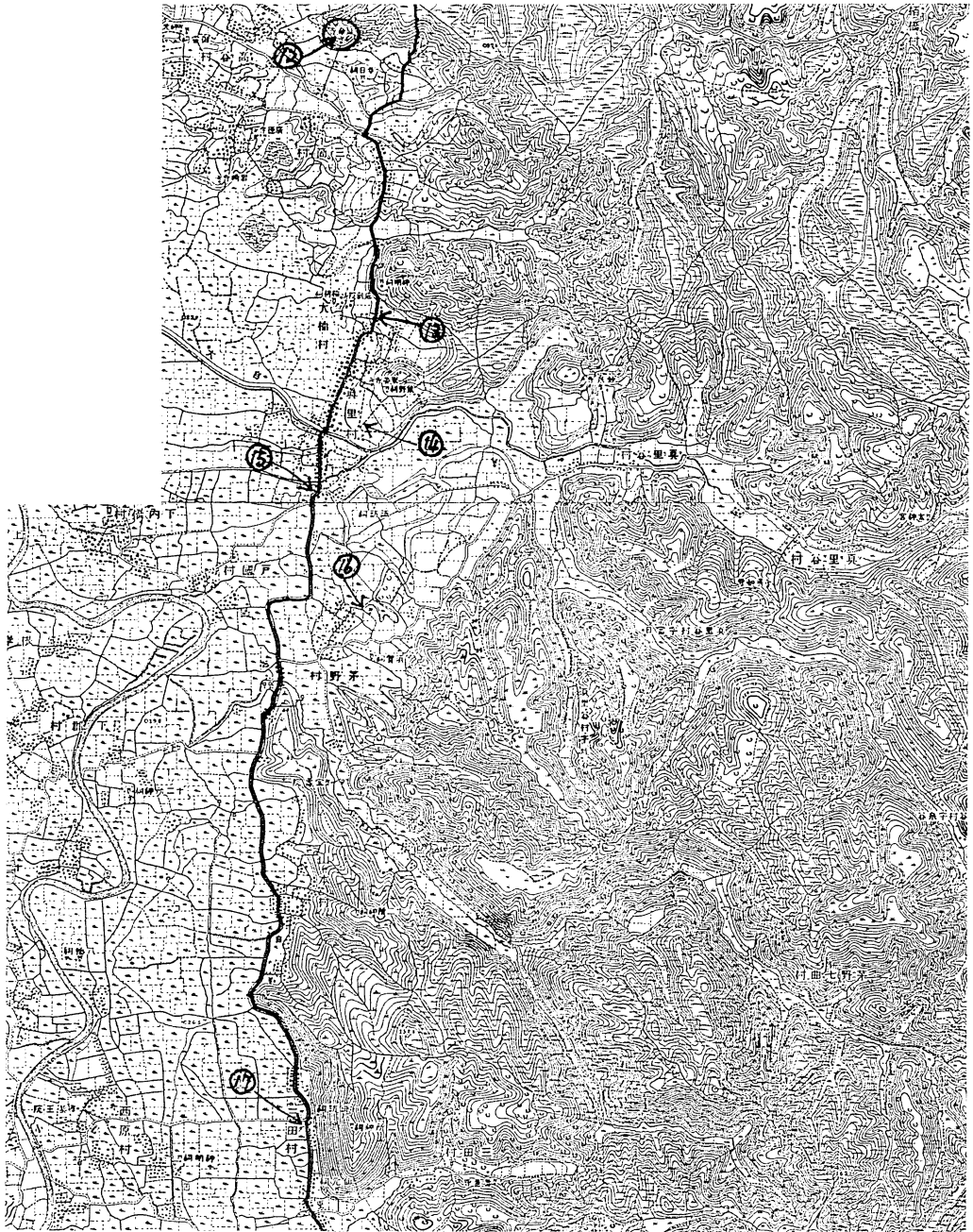


図2-3 高谷～三田

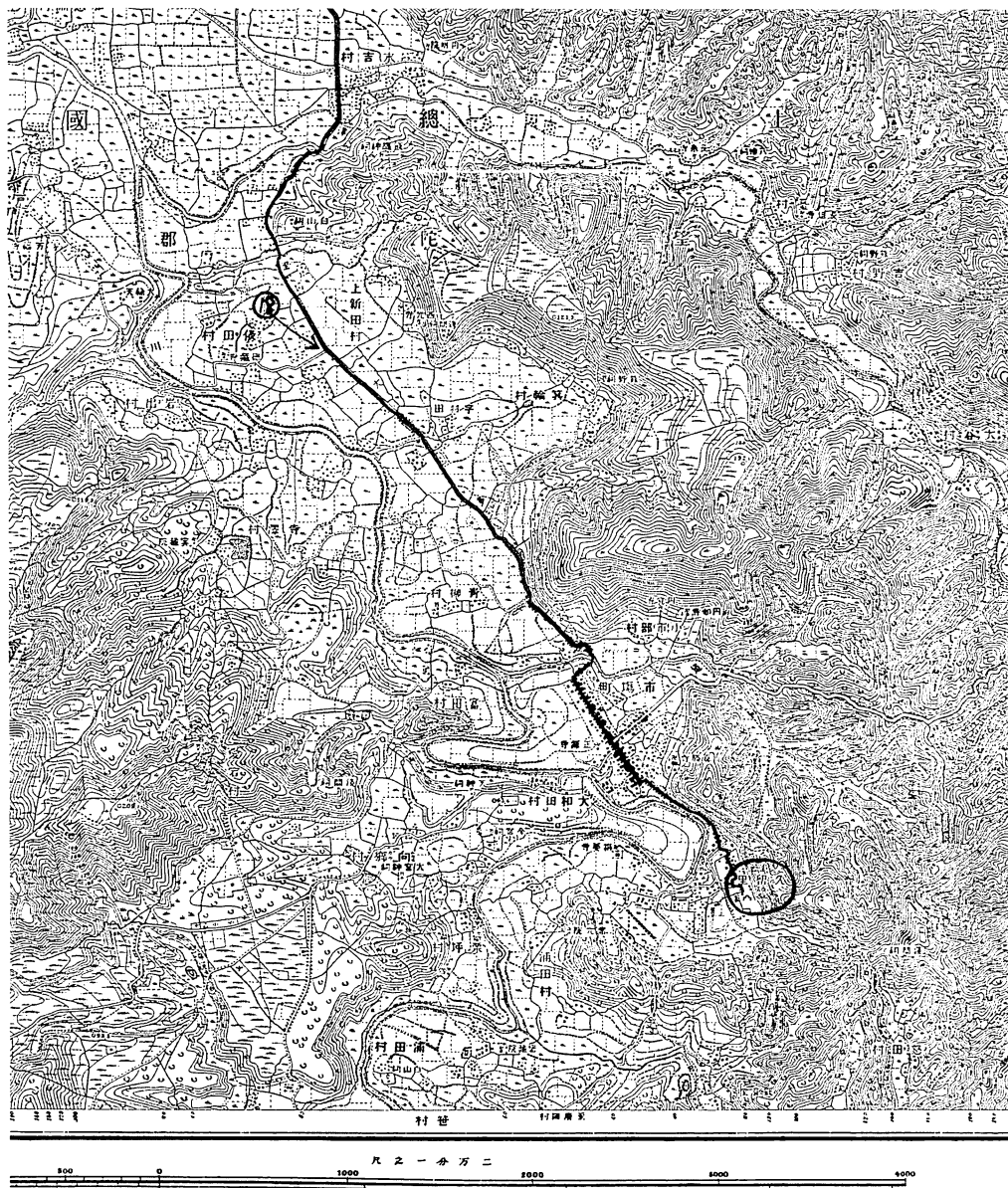


図 2 - 4 三田~久留里

なり高い方ではなからうか。交通需要の高さの反映であろう。

本稿では、殿様道に限って地図上に示してみたが、このような作業を積み重ねていけば、少なくとも地図上においての古道の復原は、かなりの精度で実現可能であると思われる。また、迅速図と地形図とを重ねてみると、道筋の多くの部分は主要道・生活道として、現在も機能していることに気が付く。その代わり、旧道の面影は失われてしまっているのが、取り残された道標の保全に古道復原地図が役立つことができればと願う。丘陵部にあり、利用も少なく荒れてはいるが、古道の面影が残っている所についても、復原地図に基づいて、景観保全の方策が考慮される糸口にもなればと、切に思う。

## 5 地域史料の教材化 — 殿様道途上より —

私が、高校現場で日常的に多忙な中で「千葉県歴史の道調査」に携わった決め手は、地域にある古道を実地に調査することで、何か授業に使える教材が見つかるかもしれないという思いであった。そして、平成十四年以来再調査に取り組み始めて、道標の発見・古道の復原に加えて、自分なりの古道調査の大きなねらいがはつきり定まってきた。それが、地域史料の教材化である。この節では、紙数の許す範囲内で、教材化し得る様々な形の歴史史料を、かいつまんで提示することで本稿の締めくくりとしたい。

まず一つに、村上・廿五里ついでい・立野・川原井等に残る源頼朝にまつわ

道標から見た古道「久留里道」と歴史史料(高崎)

る伝承や、「鎌倉通」「鎌倉街道」「大街道」等の字名、立野・川原井間で部分的に殿様道とも重なる鎌倉街道の存在(13)を取っ掛かりとして、頼朝と彼の下に結集した東国の武士団による鎌倉幕府の樹立へと、授業を展開することが可能である。その際、基本史料である『吾妻鏡』を使って、石橋山の戦い(128)での敗北以降、頼朝の安房上陸後の足取りを追っていくことで、短期間のうちに再起し、鎌倉に政権の基盤を築き得た背景を考察することも意義があると思う。

次に、公刊されている『市原市史(中巻)(14)』や『千葉県史料近世篇久留里藩制一斑(15)』を手掛かりとして、近世の陸上交通や河川の利用に目を向けつつ、多数の人員や物資が動員された参勤交代の具体的な様相を解明していく授業が構想できる。高校の教科書では、「助郷役」「参勤交代」などと歴史名辞の提示で止まり、実際上大きな負担を負った広範囲の村々、そこに生きる民衆たちの姿はあまり描かれていない。その点を補うのに、『市原市史(中巻)』の「姉崎二十五郷と人馬の継立」(p.526)や『今富村本陣の動静』(p.531)などの記述は、役立つことと思う。また、『久留里藩制一斑』では「久留里道中里程附」(p.52)として、延享二年(1785)久留里城再建完成後に、黒田家久留里藩主初代直純が総勢一八五人を伴って、江戸から久留里に着任した際の道中日記が活字化されている。これと合わせて、宝永六年(1799)上野厩橋(うまやばし)(前橋)城主酒井忠孝(ただたか)が、土屋氏改易後加増地として与えられた久留里領に、随員二〇五名を伴って江戸から巡検に赴き、往復路と

もに今富に宿泊した際の詳細な記録を含む、今富千葉家文書の利用が考えられる。幸いにも、「今富村本陣の動静」中で、明快な解説がされているので、参勤交代の実像を殿様道途上の村々から、かなりの実感を伴って引き出すことが可能である。

三つ目に、今に残る幕末維新時の傷跡から、房総での戊辰戦争の実情を探っていくきっかけが提供できそうである。ここでは一例として、第3節の⑫ a bで紹介した、門前に二基の道標がある袖ヶ浦市高谷の延命寺を取り上げてみたい。掲載した写真の仁王門には、現地をよく観察してみると、弾痕らしき小さな穴が確認できる。これは、慶応四年(1868)江戸無血開城後も、江戸を脱出



袖ヶ浦市高谷延命寺

して抵抗を続けていた、旧幕府陸軍の歩兵隊「撤兵隊」<sup>(16)</sup>の一派が延命寺に寄宿中、官軍の攻撃を受けたときの戦闘で生じたものと言われている。延命寺のある高谷は、五井からの久留里道中往還「殿様道」と五井から姉崎経由の久留里道西往還との合流す

るところでもあり、いわば交通の要衝とも言える。このような観点で、官軍側と徳川義軍が激しい戦火を交えた五井・姉崎周辺や撤兵隊の本陣が置かれた真里谷の真如寺など、そして兵たちが通ったであろう養老川・小櫃川流域や、殿様道などの久留里につながる道に目を向けていくことで、戊辰戦争がより身近に実感できるのではなからうか。今

も目に見えるものとしては、延命寺の仁王門の弾痕以外に、養老川下の激戦地や姉崎の妙経寺、そして市原市から木更津市内に点在する徳川義軍の墓などがあげられる。また、殿様道途上の市原市村上には、百人余りの撤兵隊士らがたてこもっていたために、官軍の攻撃を受けて全焼してしまった観音寺が、今は小さなお堂として残っている。これらの材料に加えて、揺れ動いた久留里藩の動向と、若き藩主林忠崇自ら家臣を率いて脱藩し、会津落城まで官軍に抵抗し続けたこと<sup>(17)</sup>で、新政府から唯一領地没収の処分を受けた請西藩の動向とを対照的に取り上げるのも、房総での戊辰戦争を学習する際の有効な手立てだと思



松本翁寿蔵碑

最後に、第3節の⑬で取り上げた木更津市茅野の善雄寺近くにある「松本翁寿蔵碑」を紹介したい。寿蔵碑のある場所は、善雄寺から南西約二五〇mの変則的な十字路角で、西に約一五〇mほどで南北に走る国道41号(現久留里街道)に出る。周囲の状況から推して、善雄寺門前を通っていたであろう殿様道途上に建てられたものとみてよさそうである。写真のように道端の塚上にあり、碑自体も高さか二m弱あるので、かなり目立つものである。「松本翁」とは、幕末から明治にかけて「茅野の師匠様」と慕われた、旧茅野村の農家出身の漢学者・教育者松本貞樹(1820

（1895）のことで、寿藏碑は明治一九年（1886）に門人たちが、師貞樹の徳をたたえて建立したものである。碑文は漢文体で書かれており、やや読み取りにくい所もあるが、要旨はほぼつかむことができる。私が出したからである。中村正直は、福沢諭吉・森有礼・加藤弘之・西周・西村茂樹らと並ぶ明六社の同人であるし、勝安房とは、もちろん勝海舟のことである。これだけでも、幕末維新時に新思想を担った先覚者やその思想を学習していくきっかけを作れると思う。さらに碑文中に、かなり具体的に貞樹の次女松本英子（1866～1928）のことが取り上げられ、関連した文脈中に佐倉藩出身の西洋農学者津田仙（1837～1908）の名があるのに注目した。明治四年（1871）岩倉遣外使節団とともに、日本初の5人の女子留学生が渡米している。その中で当時8歳の最年少者が、津田仙の娘で、後に女子英学塾（今日の津田塾大学）を創立し、女子専門教育の先駆者として知られる津田梅子（1864～1929）である。碑文からは、学制発布（1872）後に松本父子が東京に出て、津田仙の家に寄食したことが読み取れた。ここから私は、著名な津田梅子とともに、ほぼ同世代の松本英子の生涯を追っていけば、近代史の授業展開の中で何らかの教材が見出せるのではないかと考えた。このような考えのもとで、いくつかの手近な文献<sup>19</sup>を漁っていった結果、田中正造（1841～1913）そして足尾鉍毒事件との関わりが浮かび上がった。津田仙の斡旋によるものか、明治三十三年（1900）前後に毎日

新聞の記者となった松本英子は、明治三四～三五年にかけて足尾鉍毒被災地の出張取材を行い、計59回にわたって「鉍毒地の惨状」というルポルターージュを連載して、大きな反響を呼んでいるのである。また英子自身も、同志らとともに「鉍毒地救済婦人会」を結成して、被害民の救済運動にも身を投じている。これらの具体的な当時の状況とともに、田中正造が議員辞職後の明治三四年（1901）十二月十日に決行した明治天皇への直訴事件や、幸徳秋水の手になる直訴状を史料として駆使すれば、日本の公害問題の原点とも言うべき足尾鉍毒事件を、かなりの程度生々しく学ぶことができるのではなからうか。

## 6 おわりに

現在私が、古道調査や教材化しうる地域史料の掘り起こしの対象としている地域は、土地勘のある西上総地方である。古道調査では、久留里道の再調査と新規に高倉道の調査を加えて、かなり限定した範囲に絞ったつもりである。にもかかわらず、個別に「久留里道」や「高倉道」を示した道標を追っていくだけでも、相当広範囲に及び労力を要することがわかってきた。そこで、本稿の第3節で示したように、まずは殿様道に絞って、道筋の確定に目標を定めることとしたのである。

この間の実地調査の経験上、次の三点を痛感した。一つは、迅速図や地形図を必携とするのは無論のこと、何度にもわたって、道筋とそ

の周辺を徒歩で歩き来する必要があるということ。二つ目は、道標の銘文自体も、既知のものを鵜呑みにせず、実際に納得いくまで、何回でも日を代えて、その場で読み取り作業をすべきこと。三つ目は、地域の方々からの聞き取り調査の大切さである。

いずれにせよ、これからも長期にわたって、地道でしんどい実地調査が必要なことは、本稿の不十分さからも明らかである。反面、費やした時間や労力に見合うような発見が、結構あったとひそかに自負している。その一端は、第5節「地域史料の教材化」で示したつもりである。自明のことと言われればそれまでであるが、私の二十余年間の高校現場での授業実践をふまえて言えば、教科書的な叙述に身近な具体的な材料を加えて授業展開を試みれば、かなりの食いつきの良さで生徒たちとともに、歴史事象やその時代背景・社会などを学んでいくことができると思う。

最後に、久留里道など地域の古道調査の継続に当たっては、これからも先学のような業績に学びつつ、同好の士や地域の方々の温かいご協力を求めながら、辛抱強く進めていきたいと思っている。また、地域史料の教材化として一端を示したにすぎないものを、もっと十分に吟味して肉付けし、できれば将来的に授業実践報告として紹介できればと思っている。課題は、未だ山積状態である。

注

(1) 千葉県歴史の道調査報告書十五「久留里道」(千葉県教委1980)

同 十六「房総往還Ⅱ」(千葉県教委1991)

(2) 考古学を専攻し、特に小櫃川流域を中心として、養老川・小糸川流域も加えた、市原市から旧君津郡域にかけての西上総地方の古墳の分布調査を主テーマとしていた。また、教職に就いてからは、授業に活かすべく郷土史料の収集に努めていたつもりである。

(3) 落合忠二「久留里道中往還と市原」『市原地方史研究』第十二号

(市原市教委1982)

(4) 注(3)の論考では、中往還の他に、西往還と東往還が示されている。西往還は、五井から市原市姉崎を目指し、椎津の瑞安寺前から椎津新田・天羽田を経て、袖ヶ浦市の上泉・野里を通り、高谷で中往還と合流し久留里に向かうルートである。東往還は、八幡宿からほぼ今の国道297号線に沿って牛久まで行き、南に折れて養老川・小湊鉄道と並走し、月崎からは西に向かつて、君津市川谷を経て久留里に至るルートである。

(5) 道標の銘文には、変体仮名や異体字の類がしばしば用いられているが、表記の都合上「具流里ミチ」のように、常用漢字や現代仮名遣いで示している点をご了解願いたい。また、傍線は銘文中の久留里道に当たる部分を強調するために、筆者の判断で付したものである。以下も同趣旨。

(6) 本稿では、このような道標専用の石塔を、青年団造立道標と記すこととする。なお、近世の道標に匹敵するくらい、大正から昭和初期にかけて、各所に設置された青年団造立道標については、後日別稿で取り

上げる予定である。

- (7) 迅速図とは、明治十年代に陸軍参謀本部陸地測量部によって作成された、縮尺二万分の一の地図のこと。迅速測図ともいう。
- (8) 『七番日記』は、文化七年(1810)～十五年(1818)にわたる一茶の自筆日記である。一茶の房総巡歴は頻繁で、日記中には諏訪原以外にも、富津・久留里・木更津などの地名が散見される。
- (9) 吉村光敏・白井豊「道しるべからみた近世の交通圏——上総・下総地方の道しるべを例として——」『千葉県立中央博物館研究報告(人文科学) 一卷三号』(千葉県立中央博物館1991)  
ちなみに、この画期的な論考中の表3「上総・下総地方の道しるべの石塔種類」では、一位が庚申塔の24%、二位が地藏塔の14%で、馬頭観音塔は6%であった。
- (10) 小松孝「大山道と道しるべ」『日本の石仏』第39号(日本石仏協会1986)  
中では、「道しるべ造立の趣旨は、……仏教の説く作善所作に帰するものである。」とある。
- (11) 多田雄一郎「たかくら道に沿って」『袖ヶ浦市史研究』2号(1994)  
同 「たかくら道に沿って(その2)」『同』3号(1995)
- (12) 前掲の吉村・白井論文でも、同様の見解に立っている。「千葉県立中央博物館研究報告(人文科学) 一卷三号」p32注(2)の記述
- (13) 鎌倉街道の推定地の発掘調査も何箇所か実施されている。  
大谷弘幸「西上総地域の古道跡——いわゆる鎌倉街道を中心として——」『研究連絡誌』第41号(千葉県文化財センター1994)
- (14) 原山市教育委員会編『原山市史(中巻)』(原山市教委1986)  
殿様道に最も関わる「第三章江戸時代」では、今富千葉家文書など数

多くの市内の古文書を引用しながら、具体的に親しみやすい記述がなされている。

- (15) 『千葉縣史料 近世篇 久留里藩制一斑』(千葉県1990)  
これは、旧久留里藩士の森勝蔵(1838～1916)によって、大正三年(1914)にまとめられた、久留里藩全般に関する諸記録を翻刻したものである。なお、原史料は全八巻で、久留里城近くの君津市小市部こいちべにある円如寺が所蔵し、現在君津市立久留里城址資料館で保管している。
- (16) いわゆる文久の軍制改革で設けられた歩・騎・砲の洋式三兵のうち、持小筒組(銃隊)を慶応二年(1866)に改称したもの。房総に脱出した総勢約二千人を率いた撒兵頭は、福田八郎右衛門道直。
- (17) 久留里城再建協力会『久留里城誌』(1979) 参照。
- (18) 中村彰彦『脱藩大名の戊辰戦争 上総譜西藩主・林忠崇の生涯』中公新書(中央公論新社2000) 参照。
- (19) 府馬清『松本英子の生涯』昭和図書出版(1981)  
由井正臣『田中正造』岩波新書(1984)  
『木更津市史 富米田編』(木更津市1982)
- (20) 注(19)で掲げた『松本英子の生涯』のp33による。なお、著者の歴史小説家・郷土史研究家府馬清氏は、松本貞樹の4代後の御子孫で、本名松本英一(故人)である。